

『みづうみ』論：銀平の「幻想的世界」

金, 美廷
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/16019>

出版情報：Comparatio. 6, pp.32-40, 2002-05-20. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

『みづうみ』論

—— 銀平の「幻想的世界」 ——

金 美廷

はじめに

第1章 銀平の欲望と《幻想的身体性》

第2章 銀平の「現実」と（悲劇性）—不安とかなしみ

第3章 「みづうみ」の幻想性

おわりに

はじめに

作品『みづうみ』の中で、銀平は美しい女性を「追う」という異様な行為を繰り返している。それで、ここでは「追う」という行為の意味と必然性を、自我と欲望と身体との関係、もしくは欲望する「自我」と「エロス」との関係で探ってみる。次に、「美」に触れるたびに「かなしい」という言葉を連発する銀平の反応から、この「かなしい」という言葉の意味を、現実の自我の「不安」と他者との相互関係から問題意識を提起し、銀平の「罪意識」と幻覚の関係を考える。最後に、作品「みづうみ」の幻想性を、主人公「銀平」の現実と想像の間の「錯乱」と、曖昧な「回想」と「幻想」の差と、主人公「銀平」と銀平に極めて寄り添った「語り手」の視点から生じる「幻想性」の分析をすることにする。

第1章 銀平の欲望と《幻想的身体性》

(1) 欲望と「追う」という行為

作品『みづうみ』のなかの銀平の繰り返す行為の異様さは、ひたすら美しい女性だけを「追う」行為にあると言えよう。「醜い足」で象徴される主人公銀平にとって、絶えず美しい女性を追い続ける行為はどんな意味と必然性をもつのであろうか。

人間の本来の身体の意味は「欲望する存在」であり、欲望する存在とはもともと独自の本質を持つ一つの存在であると言える（注1）。銀平の身体は「醜い」。この銀平の「醜い」身体とは、銀平の心、銀平の感覚、銀平の肉体をすべて包摂した、ただ一つの「銀平—身体」という存在を意味する。「みづうみ」の中の銀平は、常に強く自分の「醜い身体」を意識し、他者の前で異常な敏感さと劣等感をもち、自分の肉体の一部である「醜」の美への哀泣をも薄々感知している。

久子の家の門の前で、とっさに水蟲といふ嘘が口を突いて出たのも、自分の足がみにくいといふ劣等感からではなからうかと、今ふと銀平の頭にひらめいた。さうすると、女の後をつけるのも足だから、やはりこのみにくさにかかはりがあるのだらうか。思ひあたって銀平はおどろいた。肉体の一部の醜が美にあくがれて哀泣するのだらうか。醜悪な足が美女を追ふのは天の摂理だらうか。（傍線論者、以下同）（注2）

生まれつきの醜い足の持ち主であるがゆえに、女を追う行為を通して宿命的に「美」を求め続ける銀平の強烈な欲望から、作品「みづうみ」の中での銀平の醜い「身体」は、欲望存在としての銀平にとっての彼の「存在可能の条件」として意味づけられていることが読み取れる一節である。ここで、

竹田青嗣が「自我」と「欲望」の関係をエロス論的に変容させて述べている箇所を引いてみる。

自我は「欲望」である。(しかしこれは自我と欲望は同義だということではない)「欲望」とは、世界との関係がエロスのな「感応関係」にある存在(つまり動物的存在)の、存在原理を指している。(注3)

竹田氏はこの引用文の中の「エロスのな感応関係」を、「この感応関係」は「欲望」の対象に対する「引き寄せ」と「遠ざけ」の力の中心性が「自我」という体制に集約されている」という意味でとらえ、自我が人間に固有の幻想的な「身体性」であることを認めている。即ち、「自我」とは「世界」のありようをエロスの世界として感じ取る力としての「幻想的な身体」であり、そのようなものとしてひとつの「欲望」であることを指摘しているが、氏のいう欲望と身体との関係と、自我と欲望との関係についてのこれらの説明は、作品『みづうみ』の主人公銀平の欲望と美女を「追う」行為の意味を解くのに示唆的な所が多い。先ず、本文の内容を引いてみると

銀平が前後不覚の酩酊か夢遊のやうに久子の後をつけたのは、久子の魔力に誘はれたからで、久子はすでに魔力を銀平に吹きかけてみたのである。昨日つけられたことで久子はその魔力を自覚し、むしろひそかな愉樂にをののいてゐるかもしれない。怪しい少女に銀平は感電してゐたのだ。(注4)

久子は銀平に後をつけさせるやうな魔力をただよはせ、その銀平の追跡を久子のうちに秘められたものが受け入れたではないか。久子の女は一瞬に感電して戦慄するやうに目ざめた。(注5)

というふうに書かれており、宮子の場合、銀平に後をつけられて、思わず手にしていたハンド・バッグを投げつけた時の強い手ごたえについての記述は、

手がじいんとしびれて胸に伝はり、全身が激痛のやうな恍惚にしびれた。(注6)

というように、追う方である銀平は勿論、追われる女の側にも、追われるだけの何かを持っており、それが《魔》性という共通点であることがわかる。既に述べたエロスの感応関係の「欲望」の対象に対する「引き寄せ」の力だけでは説明し切れない不思議な関係の人物設定であるが、ここでは「みづうみ」の中で、幻想的な感受性の変容を次から次へと重ねていく主人公銀平の「追う」行為に焦点を当てることにする。

銀平自身も「醜悪な足が美女を追ふのは、天の摂理だらうか。」と言っているように、銀平は美女を積極的に追い求めるという点ではかなり異色の存在であるといわねばならない。それでは、銀平の行動範囲に入ってくる女性はどうのような人達であろうか。先ず、永遠の女性の声を持つ湯女、それに追われて銀平の顔をハンド・バックで打つ宮子、銀平の初恋の少女やよひ、女子学生久子、天上の匂いを持つ清純な町枝等が銀平の追い求める女性達であるが、そのほかに銀平の跡をつけるストリートガールや長靴をはいた醜い中年女がいる。その中で《魔界》に住んでいるのは銀平と、久子と宮子である。「久子は銀平に後をつけさせるやうな魔力をただよはせ、その銀平の追跡を久子のうちに秘められたものが受け入れた」とされる久子も、《銀平があの子のあとをつけたのには、あの子にも銀平に後をつけられるものがあったのだ》とされる宮子も、共に《いはば一つの同じ魔界の住人》なのである。久子と宮子に共通するのは二人とも「美しい女」であることだが、実際に銀平との恋愛が成立

したのは「久子」のほうである。それから、お互いに引かれる魔性は持っていないが、銀平が強く憧れてしまう「町枝」の存在があり、また、銀平と共に切実な「かなしみ」を持っている人物として設定されているのが「宮子」である。作品の形式上の破綻であると評価される場合もあるが、作品全体が銀平の意識の流れを中心に展開される語り口になっているのに反し、「追われる」側の宮子の現実的・客観的な視点が取り入れられているのは、銀平の「追う」行為の意味の解釈に何らかの新しい見方を提示してくれる可能性があるのではないかとすることを指摘したいと思う。

(2) 銀平の〈幻想的身体性〉

そもそも「身体」とは“感じる”原理であり、人間の「身体」のエロス性は、「快－不快」、「美－醜」、「善－悪」などといった独自の審級を持っている。「身体」を、ある刺激を何らかのエロス（快あるいは苦）として“感じる”原理としてとらえる時、人間の身体性の特質としての「幻想的エロス」もしくは「幻想的な感受性」というものが認められる（注7）。従来、川端の作品のなかでも幻想的な特質が多く指摘された作品『みづうみ』の幻想性の謎に迫っていくために、ここで主人公銀平の「幻想的身体性」の特質とその感受性を確かめておくことも必要だろう。

先ず、『みづうみ』の中の銀平の対象（他者）に対しての感受性の特質と、「自我」のありようと反応を窺ってみるために、次の《湯女の美しい聲》に対し、三人称であるにもかかわらず銀平の視点とほぼ一致している語り手の説明と銀平の会話を参考にしてみよう。

湯女の今の少しふるへさうなかぼそいささやきは、花のかをりのやうに耳にこもったまま銀平がからだを動かすのについて来た。耳から匂ひのやうな陶醉がしみ入るのは、かつて知らないことだった。（注8）

「僕などが聞くと、あんたの聲のほかの、一切が消滅してしまふ。ほかの一切が消滅してしまふといふのも危険だが、しかし聲はつかまへることも追っかけることも出来ないね。流れてやまぬ時間か生命のやうなものだ。」（注9）

この湯女の聲に、清らかな幸福と温い救済を感じてみたのだった。永遠の女性の聲か、慈悲の母の聲なのだろうか。（注10）

《湯女の美しい聲》（聴覚）は銀平の耳に届いて初めて、「聴覚」という感覚の代わりに、花の香りのような「嗅覚」への不思議な感覚の変容を遂げ、いつのまにか銀平の耳は“幻想的器官”となり、遂に「匂ひのような陶醉」（幻覚）に浸るのである。《湯女の美しい聲》は銀平にとって、彼自身の自我というものも、また世界の一切をもすべて消滅させてしまいそうなものであり、永遠の「時間」と「生命」を象徴するものである。そしてそれは、何よりも醜い「身体」の持ち主である銀平自身に、「清らかな幸福と温い救済」を感じさせるものであり、それから「美しいもの」を「聖なるもの」へと格上げしつつある銀平の「幻想的な身体性」の世界の構図を窺わせる媒介体でもある。欲望する「自我」と「エロス」との関係で言えば、湯女の「美しい」声は、銀平の「自我」の不安や解体の危険なしにエロスの原理を与え、さらに新しい体験のエロスを予感させるような対象なのである。

第2章 銀平の「現実」と《悲劇性》

(1) 銀平の「不安」と「かなしみ」

人間のエロスは「自我」のエロスであるがゆえに、人間の「世界」はその秩序形成において、「不

安」と「エロスの可能性」という二つの源泉を持っている。前者は、エロスを味わう前提としての「自我」および「世界」そのものの危機にかかわる。そして後者は、「自我」および「世界」を拡張しつつ、つねに新たなエロスの対象を見出しこれをわがものとする「可能性」にほかならない（注11）。銀平の「幻想的身体」に応じて現われる、銀平に固有の世界、即ち、「みづうみ」の中の銀平の「幻想的世界」を理解するためにこれらの構図を確認しておこう。それでは、銀平の「現実」と「不安」の問題に踏み込む前に、作品『みづうみ』の中の「かなしい」という言葉に注目してみることにする。

銀平が宮子とすれちがった瞬間の描写で

振りかへったとたん、宮子の髪の毛の光り、耳やうなじの肌の色に、刺すやうなかなしみを誘はれて、「ああっ」と叫ぶと目がくらんで倒れさうになったのが、宮子には見ないでも見えた。（中略）その男はかなしみを意識してゐるやうだが、自分を失ったのだ。宮子は勿論自分を失うはずはなかったが、男から抜け出した男の影が宮子のなかへ忍んで来るやうに感じられたものだ。（注12）

他にも、少女町枝をつけてきた時の、

少女の肌の色からだけでも、銀平は自分が死にたいほどの、また少女を殺したいほどの、かなしみが胸にせまった。（注13）

引用文の中の銀平をとらえる「かなしみ」は、どんな意味をもつのであろうか。銀平は「宮子の髪の毛の光り、耳やうなじの肌の色に刺すやうなかなしみを誘はれて」跡をつけ、町枝の肌の色に「かなしみが胸にせまった」と言っているが、町枝に接した時の「かなしみ」は、自殺の念・殺人の念を抱くほどの強烈なものであることがわかる。前に触れたように、銀平の《肉体の一部の醜が美にあくがれて哀泣するのだらうか》という象徴的な文章にも繋がる内容であるとは思いますが、『みづうみ』の中で頻繁に出てくる、この謎めいた「かなしみ」という言葉に当惑さを感じざるを得ない。「醜い」銀平が自己の存在の根源に直面した時の絶望した感情として捉えるべきか、それとも「美」に触れて「自我」の現実世界の不安や解体を乗り越えた感情の表現として捉えるべきか、という問題なのである。

この「かなしみ」という言葉の意味を「自我の自己超越の感覚」と捉えた、高山鉄男の論文を、ここで引いてみる。

他に適当な語がないままに、川端氏の作品に現われた自我の自己超越の感覚を、悲しみという言葉で呼んだ。（中略）氏の作品において悲しみとは、無限の愛に動かされながら、ついにそれが不可能なものとして終ることであり、現実の生のうちにおいて生以上のものに憧れざるを得ないことである。とすればそれは生きることについての「足らなさ」の感覚と言ってもいいのであり、一種実存的な感覚である言える。生における欠落の意識に出発して、他者との融合を夢想し、結局は自己放棄を通じて、普遍的なもの、宇宙的なものに向かうこと、これは実は宗教的思惟の典型ではあるまいか。（注14）

引用文から分かるように、高山氏は川端の作品の中の「悲しみ」という言葉を《自我の自己超越の感覚》であると解している。要約すると、現実世界の自我にとっての不可能なもの、もしくは生の欠落に直面した時の自我の純粋な裸の感覚、しかしその感覚に留まらず、現実の生のうちにおいて生以上のものに憧れ続ける意識、即ち宗教的思惟の典型としての《自我の自己超越の感覚》であると言うのである。私自身も共感するところが多いが、作品『みづうみ』に限って言えば、この「かなしい」

という言葉の意味合いが『みづうみ』に出てくるすべての「かなしい」という言葉の説明に当てはまるかどうかという問題と、銀平の「現実」世界と「幻想的」世界の中の自我と他者との関係についての綿密な分析が行なわれない以上、一言で結論づけられるような性質の問題でないというもう一つの問題を指摘することにとどめておく。これからの論の展開上、一つの問題意識としてこの問題を含めて考えてみることにする。

(2) 銀平の「現実」と罪意識

美女を追跡する形で魔界を彷徨する銀平は、永遠の憧憬の対象たる母への欠落感の補填と母へ父へのそして我が子への不信と疑念から発する根本的な不安からの脱却を願っているのであり、追いつける美女たちへは、自分と共にする淪落と、自分への救済との両方を望んでいる。(中略)「みづうみ」にあって重要なのは、円環の中心にある人間存在の根源的な不安に光を当てるべく、回帰の構図の円環の一瞬一瞬における精神内部を克明に描くことであり、その各瞬間における淪落と自己浄化志向の拮抗の激しさに照らされる、美とエロスの世界を微妙に描き上げることだろう。(注15)

生まれつきの「醜い足」と、不幸な生い立ちと初恋の失敗による《かなしみ》に、いつまでもひきずられている銀平の影に、原善は銀平の人間存在の根本的な不安とその克服の道としての銀平の《美とエロス》の世界を読み取っている。つまり、追跡者であると同時に逃走者であることによって銀平の生は魔性のものと規定されるのだが、その原因である《かなしみ》、不安、コンプレックス故に、彼は外界を変形して見ざるをえないということである。

「自我」の不安という言葉で説明すると、自我にとって、現実・日常世界というのは絶え間ない「挫折」と「不安」を含んでいる。現実世界は、「自我」にとって苦痛と忍耐と屈従を強いるような世界である。「俗」な世界であり、「穢れ」た世界でもあり、又「悪」と「罪」に満ちた自我の「不安」が存在する世界でもある。「穢れた世界」は「自我」解体の怯えの反映であり、「幻想的世界」(ロマンの世界)は逆にその打ち消しとして、挫折のない世界に対する「憧れ」を映したものだと言える(注16)。「美しいもの」は、「自我」の不安や解体の危険なしにエロスの原理を与え、新しい体験のエロスを予感させるような対象である。この原理は『みづうみ』の銀平が彼の不安の克服のために「美しいもの」を追ったり、回想と連想を通した「幻想的な世界」を体験したりすると脈を一つにしていると見えよう。銀平の「現実」と「幻想」の仕組みもしくは、その原理を如実に示しているような次の文章に注目してみよう。

螢狩りである少女を見、土手で赤子の幻に追はれ、かうしてゆきあたりばつたりの女と飲んでゐるのが、銀平は一夜のうちのこととはたうてい信じられないやうだった。しかし、信じられないやうなのは、女がみにくいからにちがひなかった。螢狩りに美しい町枝を見たのが夢現で、安酒場にみにくい女とゐるのが現実だと、今はしなければならぬのだが、銀平は夢幻の少女をもとめるためにこの現実の女と飲んでゐるやうな気もしてゐた。この女がみにくければみにくいほどよい。それによって田枝の面影が見えて来さうだった。(注17)

銀平の永遠の憧れの少女を見てから、次に赤子の幻に追われ、とうとう「醜い」中年女に出会った時の銀平の内心を引いた文章であるが、銀平は《夢幻の少女をもとめるために》その現実の醜い女といるのだと言い、その女が《みにくければみにくいほどよい》とし、その理由として醜い女に現実で

接することによって《町枝の面影が見えて来さう》と思ったわけである。また《蟹狩りに美しい町枝を見たのが夢現で、安酒場にみにくい女とあるのが現実だ》と、《今はしなければならぬのだが》という銀平の言葉から、現実と夢幻の区別に曖昧な彼であるが、ここでは「現実」に意識的な区切りをつけようとする銀平の姿が窺われる。

「美」を追う奇癖とつねに付きまとう「不安」と、そしてもう一つ特徴的な彼の特質として「罪意識」を挙げるができる。次の作品の冒頭の部分を引いてみよう。

いったい銀平は自分が犯罪者として追はれているのかどうか、自分にもわからなかった。自分の犯罪は被害者から訴へられてゐないのかもしれない。(注18)

作品冒頭から彼は、「犯罪者として追はれているかどうか、自分にもわからなかった」と言いながら、信州の宿を転々とする逃亡の後、軽井沢で変装する人物として登場する。サウナ風呂から断頭台を連想して「目を見ひらいておびえ」る彼は、「牢獄の暗い壁が四方から」迫ってくるように感じて、「冷たい汗」をにじませる。「みづうみ」の銀平の行為と心理を追っていけばわかることであるが、銀平は数々の幻視や幻聴を経験する。それらの幻想には、皮膚感覚（触覚）、聴覚によって触発され、呼びさまされた意識の底に、“罪の意識”が働いていることは見逃せない。

第3章 「みづうみ」の幻想性

川端の作品のもつ幻想性は、その内容が創り出す幻想的な世界に負うところが多いが、同時にシュールレアリズムの絵画のように、精巧な描写力をもって、《現実にあるもの》を描きながら、その現実の積み重ね方、又は組み合わせ方、といった独自の手法によって生み出された幻想性をもつ作品もあるのである。(注19)

名取淳子の指摘通り、幻想的な内容と、精巧な描写によって醸し出される『みづうみ』の幻想性は、おもに主人公である「銀平」の聯想・幻想・回想によることである点が認められる。常に銀平の外部の《感覚》に触発された聯想、幻想、回想、その場面転換が実に生々しいのである。

湯女は蒸し風呂にはいつてゐるあひだ手持無沙汰らしく、香水風呂の湯を汲み出して、流し場などを洗ふ水音が聞えた。銀平には岩を打つ波のやうに思へた。岩の上で二羽のかもめがつばさを怒らせ、くちばしで突つき合つてゐた。古里の海が頭に浮かんだ。(a)

マッサージはもむやうになでさするばかりでなく、平手でぴたぴたたくものだといふことを、銀平は今まで知らなかった。湯女の掌は少女の掌だが、意外にはげしく背をたたかれつづけて、銀平の呼吸は切りきざまれ、銀平の幼な子が圓い掌で力いっぱい父親の額を打ち、銀平が下向くと、頭を打ちつづけたのが思ひ出された。それはいつの幻であったか。しかし今は、その幼い子の手が墓場の底で、おしかぶさる土の壁をもの狂はしく打つてゐた。牢獄の壁が四方から銀平に迫つて来た。冷たい汗が出た。(b)

湯女の肌のつやがあまり近くて、銀平はまぶたを閉じた。大工の使ふやうな釘箱にこまかい釘のいっぱいはいつてゐるのが、目のなかに見えた。釘はみな鋭く光つてゐた。銀平は目をあいて、天上をながめた。(c)

例えば、(a) トルコ風呂で、二羽のかもめが翼を怒らせてくちばしでつつき合っている古里の海を《連想》する。

(b) 《マッサージはもむやうになでさするばかりでなく、平手でぴたぴたたくものだ》ということをはじめて知った銀平は、《湯女の手は少女の掌だが、意外にはげしく背をたたかれつづけ》たことから、銀平の幼な子を「想起」する。幼な子は小さな円い掌で、力いっぱい、父親である銀平の額を打ち、下向くと、頭を打ちつづけたことが幻となってよみがえってくる。そして今は、その幼子の掌は《墓場の底で、おしかぶさる土の壁をもの狂はしく打つてゐた。牢獄の暗い壁が四方から銀平に迫って来た。》この「幻想」に冷たい汗をかく。

(c) 若々しい健康な湯女をつやつやした肌があまりに近いまぶしさに、まぶたを閉じた銀平の網膜には、《大工の使ふやうな釘箱にこまかい釘のいっぱいはいってゐる》のがうつり、それらの釘は《みな鋭く光つてゐた》。

ここで注意しておくべき点は、この作品での回想と幻想との区別がなかなかつきにくい点である(注20)。夢に関しては、本文中に「夢」と記されているものが二つある。それは「鼠におびやかされる夢」(p.70)と「鯛の夢」(p.88)で、明らかに回想とは区別できるが、幻想と回想とは、この作品の中では区別がつかない場合がある。

一般的に《回想》といえは過去の出来事を思い出すことをいい、「幻想」とは現実にはありえないことを想像することである。そもそも「幻想」という概念は、「現実」、「想像」という二つの概念とのかかわりで規定されるもので(注21)、過去の「現実」と「幻想」(「錯覚」・「想像」)の間のためらい一言いかえれば、出来事そのものは知覚可能であるが、それに与えるべき解釈が疑問視される場合、われわれ読者の判断のためらいが起こるのである。

(1) 事件が起こったことが疑われたのではなく、それについての「主人公」の理解が正確であったかどうか疑われる。

(2) 知覚したと思ひ込んでいるものが、実は想像の産物でないかと怪しまれる。

主人公「銀平」に、その目で見ている現実と、想像で見ているものとの、ほとんど区別しがたい「錯乱」と、時と場合による主人公の「狂気」が、「みづうみ」という作品のなかで、「回想」と「幻想」の差を曖昧にしている原因になっている。それは過去において、そして現実においてさえも、「現実」であるという確信へのとまどいが、主人公「銀平」に、ひいては語り手にも見られる。一方、そういった曖昧な表現は、主人公「銀平」の心の作用や流れを銀平に極めて寄り添った「語り手」によって自然に描かれているため、読者に、現実・非現実の区別に対するの混乱を起こす効果も与えていると言える。

ここで、『みづうみ』の作中人物の「視点」と「時制」の関係に少し触れておこう。

作品全体を通して、三人称で語られている主人公「銀平」の回想のなかでの出来事は、前にも指摘した通り、「現在の事象」として描かれている。回想の中の世界を知覚している主人公「銀平」は、「過去」に生きており、主人公「銀平」の印象を書き写している「語り手」は、「現在」に生きている。過去の回想のなかの銀平は、作品の本文のなかで殆ど過去時制で保たれているのが当然であるが、過去の出来事を「現在の事象」として語っている「語り手」によって、実際の本文の時制は、動詞の半過去時制・現在時制をも同時に保っている。「みづうみ」の語り手の特徴として挙げられるのは、語り手が三人称の主人公「銀平」の観察的視点を保ちながら一定の距離を置きつつ、多くの場合、主人公「銀平」に極めて寄り添った「視点」と「語り口」を保っている点である。その時には、「語り手」は銀平の視点になりきっているため、「語り手」が三人称の作中人物を語っているにもかかわらず、読者をして、まるで主人公「銀平」が自分のことを語っているような錯覚を引き起こす原因になっているのである。「銀平」の聯想と回想と幻想が、より直接的で親密な生々しい描写になっているのも、

そのためであろう。ここで物語の時間を大まかにE-D-C-B-Aという順で分けてみると、

A, 軽井沢のトルコ風呂でのこと

a 宮子の後をつける銀平 b 久子の後をつける銀平 c 母の村のみづうみ

B, 水木宮子の家でのこと

(水野・町枝のこと)

C, 町枝との出会いと追跡

a 母の村のみづうみ, b 久子の回想, c 母の村のみづうみ, d 久子の回想

D, 螢狩りの夜のこと

a 銀平の子供の行方(戦争の時代的背景) b 母の村のみづうみ

E, 醜い中年女との出会い

Aの夏の終りの軽井沢の場面が一番新しい《現在》ということになる。さらに、AからEまでの現在の事象の中に、生まれ故郷の「みづうみ」や肉親のこと、やよいとのこと、久子とのこと、といった具体的な時期の明示されていない様々な過去の出来事が、《回想》という形で、聯想的に銀平の《幻想》と混ざってはいってくるのである。

一番古い《過去》が銀平の幼・少年時代の思い出であり、その中間に位置する《過去》が銀平と玉木久子とのいきさつである。そして、それら二つの過去の描写に共通することは、現在の事象の展開する中に、ある現在の事象と関係しつつ、回想という形で突発的に書き込まれてゆく、ということであると言えよう。Aは、他のところに比べても、聯想・幻想・回想が多く、作中でも特に印象的な幻覚や幻聴が書き込まれている章である。時間的な流れを錯綜させて書かれた五種類の現在に、それぞれの過去の出来事がからみ、それらすべての中に、一番古い過去の「みづうみ」への回想が鑿められる、という手法が、『みづうみ』ではとられているのである。

おわりに

「醜い足」で象徴される主人公銀平にとって、絶えず美しい女性を追い続ける行為はどんな意味と必然性をもつのであろうか。自我と欲望との関係から、銀平の「自我」と「世界」のありようを、エロスの世界として感じ取る力としての彼の「幻想的な身体性」で、「美」に触れる時の「幻想的な感受性」の変容に注目し、分析を行なってみた。欲望する「自我」と「エロス」との関係で言えば、銀平にとって「美しい」女は、銀平の「自我」の不安や解体の危険なしにエロスの原理を与え、さらに新しい体験のエロスを予感させるような対象であるのがわかった。それゆえ、「美しい」女を追いつづけざるを得なかったのだ。銀平が「美しいもの」を追ったり、回想と連想を通じた「幻想的な世界」を体験したり、自分の「不安」や「罪意識」を媒介にした数々の幻視や幻聴を経験するのもすべて繋がっていると見えよう。最後に「銀平」の現実と想像の間の「錯乱」と、曖昧な「回想」と「幻想」の差と、主人公「銀平」と銀平に極めて寄り添った「語り手」の視点から生じる「幻想性」も指摘できたと思う。

<注>

(注1) 竹田青嗣『エロスの世界像』(講談社, 1997.3) p.195

(注2) 川端康成「みづうみ」『川端康成全集第十八巻』(新潮社, 1980.3) p.33

(注3) 竹田青嗣 前掲書, p.134

- (注4) 竹田青嗣 前掲書, p.31
- (注5) 注2 前掲書, p.88
- (注6) 注2 前掲書, p.44
- (注7) 注1 前掲書, p.20
- (注8) 注2 前掲書, p.16
- (注9) 注8 と同じ。
- (注10) 注2 前掲書, p.11
- (注11) 注1 前掲書と同じ。
- (注12) 注2 前掲書, p.57
- (注13) 注12と同じ。
- (注14) 高山鉄男「悲しみと日々ー川端康成作品における自我の構造ー」(『季刊芸術』第17号, Vol.5, No. 4) p.92
- (注15) 原善「みづうみ」論『川端康成の魔界』(有精堂, 1987.4) p.98
- (注16) 注1 前掲書, p.97
- (注17) 注2 前掲書, p.129
- (注18) 注2 前掲書, p.9
- (注19) 名取淳子「『みづうみ』のもつ幻想性について」(『立教大学 日本文学』第45号, 昭和55.12) p.75
- (注20) 注19 前掲書と同じ。名取氏は「「現実」の不確かさが、回想と幻想との区別をつけにくいものとし、それも川端の手法として、『みづうみ』の幻想性を高める結果となっている」と述べている。p.77
- (注21) ツヴェタン・トドロフ『幻想文学論序説』(東京創元, 平成11.9) p.42